

シーン1：オープニング(5分)

場所：剛田質店の店内。シャンデリアが輝き、壁には豪華な装飾品が並ぶ。

(剛田がカウンターでワイングラスを片手に微笑み、優雅に振る舞っている。)

剛田：

「今日も素晴らしきゴージャスな一日だ。さあ、どんな輝ける逸品が私のもとへ舞い込んできくるのか…楽しみだ！」

白金：(奥から伝票を持って登場)

「剛田さん、さつき届いた荷物、確認しましたか？どうせまた『ゴージャス』なやつじゃないと駄目とか言うんですけど。」

剛田：(胸を張り)

「当然だ！『ゴージャスたるもの優雅たれ』が私の信条だからな。」

白金…（小声で）

「信条とか言ってる、ただの趣味ですよね…。まあいいですけど。」

（店の扉が開き、顧客が屋久杉のベッドを丁寧に運び入れる。）

シーン2：依頼品の登場と鑑定（20分）

場所…店内の中央。巨大な屋久杉のベッドが置かれ、剛田と白金がその前に立つ。

顧客…（ベッドを指しながら）

「これ、屋久島の杉を使った手作りのベッドなんです。かなり貴重な木材を使ってるんですけど、どうでしょう？」

剛田…（近づいて木目をじっくり見つめる）

「おお、なんとという気高さ…！この年輪の美しさ、まさに時間の彫刻だ！」

白金…（冷静にメモを取りながら）

「確かに立派な材質ですね。でも、普通のベッドとどう違うか詳しく見ないと…。」

（剛田がいきなり木目に耳を近づけ、何かを聞く仕草をする。）

剛田…

「静かに…聞こえるか？この木が語りかける声だ。」

白金…（呆れて）

「語りかけるって…普通に木材の乾燥音じゃないですか。」

剛田…（興奮しながら）

「いや、これは屋久杉にしかない特別な響きだ！時を超えた木々の囁き…まさにゴージャス！」

顧客…（興味津々）

「そんなにすごいんですか？」

白金：（心の中で）

「また始まったよ…。この人の『ゴージャス』理論。」

シーン③：実際に使ってみる（15分）

場所：店内。剛田と白金が屋久杉のベッドを囲む。

剛田：

「さて、目で見るだけでは真の価値はわからない。直接使って、このベッドの魅力を体感してみようではないか。」

白金：（驚きながら）

「え、今ですか？ 剛田さん、ここお店ですよ？」

剛田：（優雅に手を広げ）

「これが私の店だ。この場で試すことこそ、最もゴージャスな方法だ！」

顧客…（苦笑しながら）

「まあ、実際に使ってもらえたら確かに参考に
なりますけど…。」

（剛田がベッドに腰を下ろし、寝転ぶ準備を
始める。白金が慌てて止めに入る。）

白金…

「ちよっと待ってください！靴を脱いでくださ
い！それに布団とか何も無い状態で寝るんで
すか？」

剛田…（微笑みながら）

「確かに。白金君、急いで最もゴージャスな布
団を持ってきてくれ！」

白金…（頭を抱えながら）

「持ってくるのは僕なんですね…。はい、わかり
ましたよ。」

（布団を敷き、剛田がその上に優雅に横たわ
る。深呼吸して目を閉じる。）

剛田…

「これは…！眠りの感覚が次元を超えた…まるで大自然に包まれるようだ！」

白金…（眉をひそめて）

「次元を超えるって何ですか。普通に寝心地良いだけでしょう。」

（剛田が起き上がり、今度は読書のポーズを試す。想像の紅茶カップを持ち、優雅にベッドに腰掛ける。）

剛田…（満足げに）

「読書に最適な角度、そして背中を支えるこの心地よい硬さ…まさに『哲学的ゴージャス』だ！」

顧客…（感心しつつも笑顔）

「そこまで熱心に試してもらえるなんて、ちょっと感動しますね。」

白金：（小声で）

「感動っていうか、引いてるんじゃないか…？」

（剛田がベッドの端に立ち、劇的なポーズを決める。）

剛田：

「結論として、このベッドは真にゴージャスである！鑑定に値する！」

白金：

「いや、それを言うためにここまでやる必要あったんですか…？」

顧客：（和やかに）

「でも、楽しそうでしたよね。満足しました。」

シーン④：値段交渉（10分）

場所：剛田質店の店内、屋久杉のベッドの前。

（剛田は満足げにベッドを眺めながら、顧客に向き直る。）

剛田：

「さて、これほどのゴージャスな逸品を手放すには、それ相応の対価が必要だろう。」

顧客：（少し緊張しつつ）

「えっと、いくらくらいになりますかね？」

剛田：（胸を張りながら）

「まずは、この木の価値を考えるべきだ。屋久杉、その年齢は千年以上。この大地の歴史に思いを馳せよ！」

白金：（小声で）

「思いを馳せるのは自由だけど、値段を教えてください。」

剛田：（目を輝かせながら）

「このベッドにふさわしい額は…250万円！」

顧客：（驚いて）

「じ、250万円？ そんなに高く？」

白金：（割って入る）

「ちよつと待ってください、剛田さん！ 高すぎますよ！ いくら屋久杉でも、その額じゃ普通の人は手が出ません！」

剛田：（優雅に手を振り）

「普通でないからこそ、ゴージャスなのだよ、白金君。価値ある物にはそれなりの評価が必要だ。」

顧客：（困った表情で）

「いや、でも正直、そんなに高額だと売るのも難しいと思いますし…。」

白金：（機転を利かせて）

「では、こうしましょう。このベッドが本当にその値段に値するか、もう一度詳しく確認してみます。その上で最適な価格を出します。」

（剛田が不満そうな顔をするが、白金の提案を渋々受け入れる。）

シーン5：真の価値の発見（15分）

場所：剛田質店の作業場。ベッドを詳しく調べた剛田と白金。

（白金がベッドの下を覗き込むと、何かを見出す。）

白金：

「あれ…剛田さん、これ見てください。何か刻印があります。」

剛田：（急いで確認しながら）

「刻印だと？」

（白金が刻印を丁寧に拭き、文字を読み上げる。）

白金…

「『千住木太郎作』…って書いてあります。これ、もしかしてあの有名な木工職人の…？」

剛田…（目を輝かせながら）

「なんと！千住木太郎だと…彼はかつて、宮廷家具を手掛けた天才職人。その作品は今や幻と言われている！」

白金…（感心しつつ）

「つまり、このベッドはただの屋久杉製じゃなくて、職人の歴史的な作品ってことですね。」

剛田…（誇らしげに）

「白金君、これぞ真のゴージャスだ！この発見により、250万円の査定額はむしろ控えめだったことが証明された！」

白金…（苦笑しながら）

「いやいや、値段を上げるつもりですか？」

顧客：（驚きつつも興奮して）

「まさか、そんなにすごいものだったなんて…。

これ、売るのがちょっと惜しくなってきました

ね。」

剛田：（自信満々に）

「心配無用。我が剛田質店なら、このベッドの価値を存分に活かしてくれる！」

シーンの：エンディングのドタバタ（10分）

場所：剛田質店の特設コーナー（即席で作られた屋久杉ベッド展示エリア）。

（剛田が店内に「特設屋久杉コーナー」を作ると言い出し、白金が慌てて準備を手伝う。）

白金：

「剛田さん、本当にこんな即席の展示コーナーでいいんですか？」

剛田…（優雅に手を振りながら）

「問題ない。ここに屋久杉の神秘と千住木太郎の偉業を伝える空間が生まれるのだ！」

（顧客も手伝いつつ、展示が完成。剛田が最後の仕上げに豪華なカーテンを取り付ける。）

剛田…（満足げに）

「これで完璧だ。さあ、幕を開けよう！」

（剛田がカーテンを引くと、展示のベッドが照明を受けて輝く。）

白金…（疲れた表情で）

「なんとか形にはなりましたね…。でも、これで売れるんでしょうか？」

顧客…（感心しながら）

「なんだか自分の持ち物がこんなふうにあわれるの、ちょっと誇らしい気分です。」

剛田：（胸を張って）

「さあ、これからこのベッドの真価を求める者たちが殺到するだろう。その日まで、このゴージャスを守り抜くのが我々の使命だ！」

白金：（ぼそっと）

「結局、仕事が増えただけな気がするけど……まあいいか。」

（剛田が決めポーズを取り、店内に響く声で締めくくる。）

剛田：

「うーん、ゴージャス！」

エピソード：ゴージャスな安眠？（5分）

場所：剛田質店の奥の部屋。店内とは異なり、少し落ち着いた雰囲気の間。屋久杉のベッドが中央に置かれている。

（夜中、剛田が豪華なパジャマを着て、屋久杉のベッドに横たわる。）

剛田：（満足げに）

「なんと心地よい夜だ。これほどの安眠を約束するベッドに巡り合うとは…。うーん、ゴー
ジャス！」

（照明が暗くなり、剛田が静かに眠り始める。しかし、数分後に寝返りを打つと、ベッドの端に転がり落ちる音が響く。）

剛田：（落下後、床から声だけ）

「…むむ、何だこの衝撃は？まるで大地が私を抱きしめているようだ！」

（そのままカットし、翌朝の場面へ切り替わる。）

翌朝：剛田の新たな発見（5分）

場所…剛田質店の店内。白金がカウンターで伝票を整理している。剛田が昨夜のパジャマのまま姿を現す。(

白金…(驚いて)

「剛田さん、まだその格好なんですか？何かありましたか？」

剛田…(胸を張って)

「いや、昨夜は驚くべき発見をしたのだよ！」

白金…(呆れながら)

「また何か『ゴージャス』なことですか？」

剛田…(自信満々に)

「この屋久杉のベッドは、ただ寝心地が良いだけではない。今なお生きているのだ！」

白金…(眉をひそめて)

「生きてる…ですか？それ、どういうことですか？」

剛田…（床に落ちた際のジェスチャーを交えながら）

「昨夜、私は寝返りを打ってこのベッドから転げ落ちた。そして気づいたのだ。これはベッドが私の動きに反応し、私を大地に返そうとしている証だ！」

白金…（冷静にツツコミ）

「いやいや、それ単にベッドの幅が狭かっただけじゃないですか。」

剛田…（慌てて否定しながら）

「違う！これは屋久杉が私に、自然と共に生きよと言っているのだ！」

白金…（呆れつつ）

「自然と共に生きるって、床で寝ることですか…。もう好きにしてください。」

（顧客が笑顔で店に入ってくる。）

顧客…

「おはようございます！ベッドの調子はいかがですか？」

剛田…（真剣な顔で）

「素晴らしい！このベッドはただの家具ではない。人生そのものを教えてくれる！」

顧客…（笑いながら）

「それは良かったです。でも、落ちないように気をつけてくださいね。」

白金…（ぼそっと）

「もう遅いんですけどね…。」

（店内に和やかな笑いが広がり、剛田が決めポーズを取り、声を張り上げる。）

剛田…

「うーん、ゴージャス！」

（幕）